

【やや黄色い熱をおびた旅人】

6

## 人を待つ人

1997年7月

ベオグラード  
(ユーゴスラビア)

原田宗典

最初、私はつい苦笑してしまったのだった。一見したところ、それは滑稽な光景に思われたのだ。

ユーゴスラビアの首都ベオグラードの国際空港に到着して、間もなくのことだ。私たち取材班の四人は、出口のゲートを目の前にして、ずいぶん長いこと足止めをくらっていた。

空港に降り立った直後の入国審査は思いの外あっさりと済んだものの、荷物を受け取る段になると、軍服を着た検査官が出てきて、急にややこしいことを言い始めたのだ。各人の手荷物は何の問題もなかったのだが、総勢四名の取材班が持ち込むにしては、撮影機材が多すぎたらしい。まだ二十代とおぼしき若い検査官は、職務上の使命感に燃えてか、或いは

個人的な好奇心からなのか、書類を手に撮影機材を一つ一つ照らし合わせた上に、そんなことを訊いて何になるのか理解に苦しむ質問をしてくるのだった。最初のうちは四人がかりでそれに応対していたのだが、やがて検査官の子供じみた頑迷さに閉口した私は、目立たないように後ずさって、静かにその場から離れた。

すぐ隣の手荷物搬送用のベルトコンベアが停止していたので、その上に腰を下ろし、懐から煙草を取り出す。パッケージを軽く振って、飛び出した一本をくわえる。

ユーゴスラビアの人々は、煙草と濃いコーヒーが滅法好きだという話は聞いていたが、それは本当のことらしかった。現に国際空港の中もごく一部の空間を除けば、どこでも煙草が吸えるように、あちこちに灰皿

が用意してある。これは私みたいな煙草呑みにとっては、実にありがたいことだった。

私はジュネーヴで試しに買ってみたスイス製の煙草を、ゆっくりとふかした。それより他にやるのがなさそうなので、ここはひとつできるだけ時間をかけて喫煙しようと思っていたのだ。

右手のベルトコンベアの向こう側、簡易な衝立で仕切っただけの狭苦しい空間の中で、分ならず屋の検査官とディレクターのT君が、互いに拙い英語で喧々諤々やりあっている。しばらく耳を傾けてみたが、結論はなかなか出そうになかった。

意外ときつくて、くらくらしそうなスイス製の煙草をふかしながら、私はあらためてこの手荷物受け取りのロビーを見回した。国際空港と言

えば、どこもかしこも乗客でごった返しているのが普通だが、このロビーにはまったく人がなかった。手荷物を流すベルトコンベアは一番から八番まであつて、設備としては立派なものだ。しかし今のところ実際に稼働しているのは、一番から三番までの三機だけであるらしい。ようするにそれだけ旅行者が少ないということなのだろう。

ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争の後、ユーゴスラビアは世界中から経済封鎖の措置をくらった。もう何年にもなる。おかげで新ユーゴスラビアとして、セルビア人中心の国をつくり出そうとした矢先、国内の経済は混迷をきわめた。ギネスブックに記載されるほどのインフレーションが起きたというのだから、国が滅びてしまってもおかしくはなかった。戦争という毒は、大量の人間を殺すばかりでなく、経済を麻痺させるこ

とによって、せつかく生き残った人たちの人生をも殺してしまうのだ。

煙草の灰が長くなってきたことに気づき、私は立ち上がって、柱の脇に据えてある灰皿のところまで行つた。灰を落とし、その場で立つたまま、残りの煙草をふかす。と、六番のベルトコンベアの傍らにある柱の陰から、戦闘服を着た兵士が静かに現れた。まだ若くて、両頬がうっすら紅い二十代前半の兵士だ。彼は、いかつい自動小銃を手にしていた。私の動きに何か不審なものを感じたのか、灰色の瞳でじつとこちらの様子を窺っている。その視線は刺すようだった。しかも感情を殺した表情のまま、まったく変わることがないので、仮面に見つめられているような気がした。もし今、私が突然出口のゲートに向かって走り出したら、彼は何の躊躇いもなく私の背中を撃つだろう。その様子を瞬間的に想像

して、私は顔をこわばらせた。本当は彼に笑いかけて、少しでも心証をよくしたいところだったが、まったく笑えなかった。

人気のない、がらんとしたロビーの中で、自動小銃を手にした兵士と、煙草を手にした私は、無言のまま対峙していた。彼はこの寒々しい空間の支配者のように見えた。私はこわばった顔のまま、煙草をもう二、三服吸うと、灰皿で揉み消した。それから思い切って踵を返し、元いたベルトコンベアに腰を下ろした。

彼は、ずっと私を見ていた。と言うか監視していた。その間、表情が変わることはただの一度もなかった。彼は、私が元通りに座つたのを見届けると、静かに柱の陰に消えた。

私の緊張は、なかなか解けなかった。自動小銃に怯えたわけではない。

あの兵士の表情、彼の顔が私を緊張させたのだ。あれは、人を殺せる顔だ。と、私は思った。まだ頬の紅い、少年のような青年なのに。あんな顔をして生きていくのだなんて、何という殺伐とした人生を選んだことか。それとも選択の余地など、彼にはなかったのだろうか——戦争というものが人間に与えてくれる選択肢は、結局のところ二つしかない。生きるか、死ぬか、だ。当然、生きる方を選んだ結果として、人を殺せる顔になってしまったのだとしたら、誰が彼を責めることができるだろうか？

私は暗澹たる気持になった。ベオグラード市街にも、あんな顔をした歩哨があちこちに立っているのだろうか。そう思ってふと顔を上げ、出口のゲートを見やる。灰色の曇りガラスの自動ドアは閉ざされた状態で、



外の風景は一切見えない。

そのまま視点を右へ移動させると同時に、私はあることに気づいた。今までコンクリートの塗り壁だとばかり思っていた真正面の壁面には、実は自動ドアと同じ曇りガラスが嵌め込まれていた。むしろちよつとやそつとで碎けるような代物ではなく、もしかしたら防弾ガラスかもしれない。足元から天井の際まで、幅は二十メートル近くあろうか。かなりの面積なので、おそらく繋ぎ目だろう、ほぼ二メートルおきに細いスリットが縦に入っている。そこだけ透明になった繋ぎ目の幅は一センチにも満たない。しかしよくよく見ると、出口に近いところから順に、その細いスリットに沢山の人が群がっていた。曇りガラス越しに、彼らの姿は薄ぼんやりとした影絵のように見える。

何をしてるのだろう？

疑問を感じると同時に、私はつい苦笑してしまったのだった。僅か一センチ足らずのスリットに入れ代わり立ち代わり群がる人々の影。一見したところ、それは滑稽な無言劇のようだった。兵士の灰色の瞳に見据えられた直後で、暗い気持になりかけていた私は、どんな些細なきっかけでもいいから、少し笑いたかったのだ。

しかし私の思惑は大きく外れた。

目を凝らしてみると、その細い透明なスリットには、二つか三つの瞳が縦に並んでいた。彼らは立ったり、中腰になったり、しゃがんだりして、ガラス面に鼻を押しつけ、片目で中の様子を覗いているのだ。一本のスリットの前からじっと動かない人影もあれば、二メートル間隔のス

リットを順ぐりに移動する人影もある。中を覗く瞳の一つと目が合うなり、私の口許から苦笑が消えた。

彼らは待っているのだ。

父母か兄弟か恋人か親友かは分からないけれど、自分にとってかけがえのない人が帰ってくるのを、待っているのだ。しかもその人は気楽な外遊に出かけていたわけではない。おそらくはボスニア・ヘルツェゴビナの戦火を生き延びた人で、もう何年もの間、逢いたくても逢えなかった相手だ。その無事な姿を一分でも一秒でも早く確かめたくて、彼らは恥も外聞もなく鼻がひしゃげるほどガラス面に顔を押しつけ、必死の思いで中を覗いているのだ。

かつて自分はあるなふうにして、誰かを待ったことがあったらどうか？

一秒でも早く逢いたくて、胸が張り裂けそうになったことがあっただろうか？ ない。ただの一度もない。そんな自分が、私は恥ずかしかった。